

平成 25 年 5 月 11 日

桜庭一樹レクチャー会

I. 講演会講師について

i. 経歴

島根県生まれ、鳥取県出身。本名は非公開。特技は極真空手(初段)。読書家として知られ、年間400冊の本を読むという。大学在学中にDENiMライター新人賞受賞。1999年「夜空に、満点の星」で第1回ファミ通エンタテインメント大賞小説部門佳作を受賞しデビュー。ゲームのノベライズやライトノベル、ジュブナイルなどの作品や、山田桜丸名義でゲームシナリオを数多く手がけた。

2003年『GOSICK』シリーズで注目を集め、さらに2004年発表の『推定少女』『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』が高く評価される。後者が東京創元社編集者の目に止まり、2005年、初の一般向け作品として『少女には向かない職業』を刊行。2006年刊行の『赤朽葉家の伝説』で第60回日本推理作家協会賞（長編及び連作短編部門）受賞。2008年、『私の男』で第138回直木賞を受賞した。

ii. 受賞歴

1999年「夜空に、満天の星」

第1回ファミ通エンタテインメント大賞佳作入選

同年(?)『AD2015隔離都市 ロンリネス・ガーディアン』と改題し刊行、デビュー（現在絶版）

2007年『赤朽葉家の伝説』第28回吉川英治文学新人賞候補。第60回日本推理作家協会賞（長編及び連作短編部門）受賞。第137回直木賞候補。

2008年『私の男』第138回直木賞受賞。

iii. 著作一覧(※一般文芸レーベルから出版された小説作品のみを掲載)

少女には向かない職業（2005年9月 東京創元社）

ブルースカイ（2005年10月 ハヤカワ文庫 JA、2012年5月 文春文庫）

少女七竈と七人の可愛そうな大人（2006年6月 角川書店）

赤朽葉家の伝説（2006年12月 東京創元社、2010年9月 創元推理文庫）

砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない A Lolypop or A Bullet（2007年2月 富士見書房、2009年2月 角川文庫）

青年のための読書クラブ（2007年6月、新潮社）

私の男（2007年10月、文藝春秋、2010年4月、文春文庫）

赤×ピンク（2008年2月、角川文庫）

荒野（2008年5月、文藝春秋）

推定少女（2008年10月、角川文庫）

ファミリーポートレイト（2008年11月 講談社）

製鉄天使（2009年10月、東京創元社）

道徳という名の少年（2010年4月 角川書店）

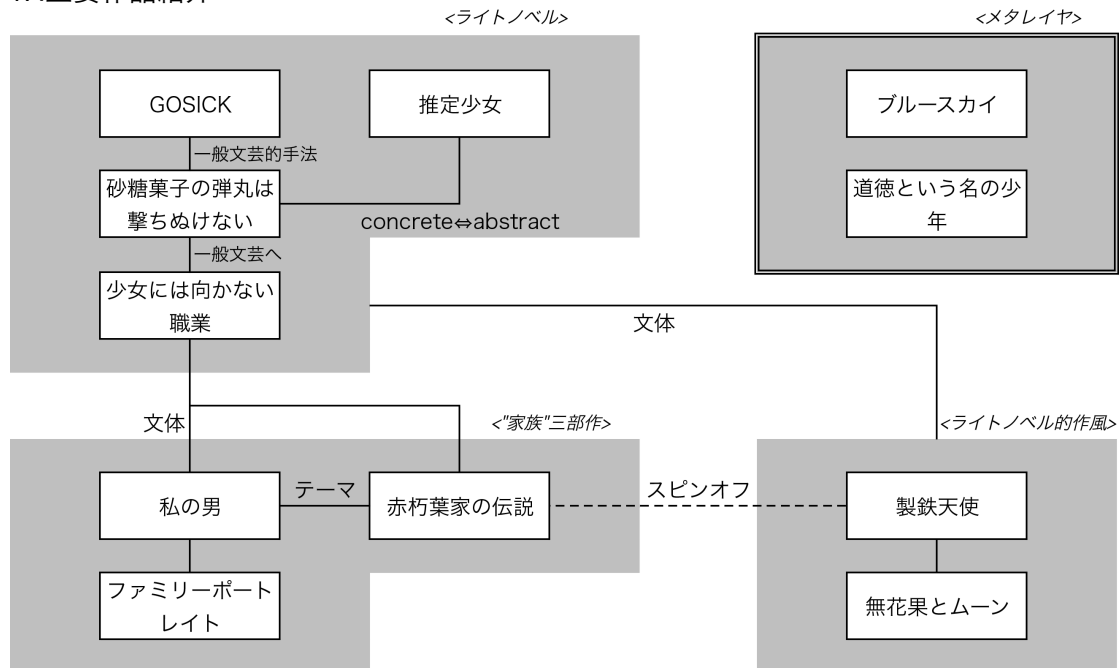
伏 鷹作・里見八犬伝（2010年11月 文藝春秋、2012年9月 文春文庫）

ばらばら死体の夜（2011年5月 集英社）

傷痕（2012年1月 講談社）

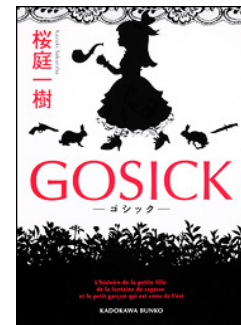
無花果とムーン（2012年10月 角川書店）

iv. 主要作品紹介



「GOSICK」

伝説のミステリ、「GOSICK」シリーズ、堂々の復活！！
世界は謎、彼女はもっと謎。
超頭脳の美少女と、留学生・久城の冒険が始まる――



前世紀初頭、ヨーロッパの小国ソヴェール。極東の島国から留学した久城一弥は、聖マルグリット学園の図書館塔で奇妙な美少女・ヴィクトリカと出会った。彼女の頭脳は学園の難事件を次々と解決してゆくが、ある日ヴィクトリカと一弥は豪華客船に招待され、そこで本物の殺人事件に遭遇してしまう。やがて彼ら自身に危機が迫ったとき、ヴィクトリカは――！？直木賞作家が贈る、キュートでダークなミステリ・シリーズ。

- ・ 著者公認ヴィクトリア朝萌え小説
- ・ 対立構造
- ・ ライトノベルの限界

「少女には向かない職業」

あたし、大西葵13歳は、人をふたり殺した……あたしはもうだめ。ぜんぜんだめ。少女の魂は殺人に向かない。誰か最初にそう教えてくれたらよかったのに。だけどあの夏はたまたま、あたしの近くにいたのは、あいつだけだったから――。これは、ふたりの少女の凄絶な《闘い》の記録。『赤朽葉家の伝説』の俊英が、過酷な運命に翻弄される少女の姿を鮮烈に描いて話題を呼んだ傑作。解説＝杉江松恋

- ・ 第二の“処女作”
- ・ ライトノベルの制約を超えた作品



「ブルースカイ」

1627年、魔女狩りの苛烈な嵐が吹き荒れるレンスの町で、祖母と水車小屋で暮らす10歳の少女マリーは、奇妙な恰好をした“アンチ・キリスト”に出会った。2022年、シンガポール—3Dアーティストの青年ディッキーは、絶滅したはずの“少女”というクリーチャーと出会う。そして、2007年日本……。3つの箱庭と3つの青空、そして少女についての物語。少女をテーマに描き続ける桜庭一樹、初期の傑作長編です。

- ・ 現代の少女と、未来における青年
- ・ 社会風刺
- ・ ネオデニー



「少女七竈と七人の可愛そうな大人」

川村七竈は美しいかんばせを持って生まれた呪われた美少女。鉄道を愛し、孤高に生きる。いんらんな母は、すぐに新しい恋におちて旅に出る。祖父と二人の日々。周囲から常に注目される彼女が心を許すのは親友の雪風だけだ。二人でつくる鉄道模型の世界。完成された世界。母のかつての男の訪問、噂をききつけたスカウトの誘い、可愛そうな大人たちの騒ぎはだんだんと七竈を巻き込んで――。

- ・ “ウンコの話から始まった”
- ・ 地方都市、家、鉄道模型のマトリョーシカの箱庭
- ・ 視点人物の多様化



「砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない A Lollypop or A Bullet」

どこにも行く場所がなく、そしてどこかに逃げたいと思っていた。そんな13歳の二人の少女が出会った。リアリストの山田なぎさと不思議系転校生の海野藻屑。すべては生きるために、生き残っていくために――。

- ・ 藻屑ちゃん可愛い
- ・ 藻屑ちゃん可愛い
- ・ “ゼロジャンル”とは何か



「推定少女」

彼女たちは、夜を逃げる。直木賞作家の最初期傑作。衝撃のラスト×3を収録。

とある事情から逃亡者となったぼくこと巢籠カナは、逃げ込んだダストシュートの中で全裸の美少女・白雪を発見する。黒くて大きな銃を持ち、記憶喪失を自称する白雪と、疑いつつも彼女に惹かれるカナ。2人は街を抜け出し、東京・秋葉原を目指す…直木賞作家のブレイク前夜に書かれた、清冽でファニーな成長小説。幻の未公開エンディング2本を同時収録。解説・高野和明



「道德という名の少年」

町でいちばん美しい三姉妹が死んだとき残ったのは（1, 2, 3 悠久！）、愛するその「手」に抱かれて私は天国を見る（ジャングリ・パパの愛撫の手）——ゴージャスな毒気とかなしい甘さに満ちた作品集。

- ・ 独立した短編でありながら繋がりのある話
- ・ 名前について



「無花果とムーン」

直木賞作家 桜庭一樹がおくる少女冒険譚！！月夜（あたし）は、奈落（お兄ちゃん）がだい好き——。十代のある夏、ある地方の、ある町。急死した兄の面影を探して、少女は世界の境界を、越える。『GOSICK』の著者がおくる、すこし不思議でとびきりキュートな最新長編！！



「あの日、あの瞬間がすべて。時間よ、止まれ」あたし、月夜は 18 歳。紫の瞳、狼の歯を持つ「もらわれっ子」。ある日、大好きなお兄ちゃんが目の前で、突然死んでしまった。泣くことも、諦めることもできない。すべてがなんだか、遠い——。そんな中、年に一度の「UFO フェスティバル」が。そこにやってきた流れ者の男子・密と約。あたしにはどうしても、密がお兄ちゃんに見えて——。少女のかなしみと妄想が世界を塗り替える。そのとき町に起こった奇跡とは？？

- ・ 文体
- ・ 死を繰り返し繰り返し描く

(内容紹介はそれぞれの出版社ホームページより引用)

II. 課題本

i. 「赤朽葉家の伝説」

… 地方である必然性。モダニズムの展開と収束。

cf. 「製鉄天使」

… 文体。マジックリアリズムの実践。

ii. 「私の男」

… 聖女信仰に対するアンチテーゼ。

iii. 「ファミリーポートレート」

… 故郷を捨てるということ。“神”の代替的存在について。

III.終わりに

「言いたかったことはそれだけか？」と訊くであろう貴方に懺悔を。

嗚呼——閉幕<<カーテン・フォール>>

cf.参考文献

なんか、いっぱい、ある。言ってくだされば出典元をお渡し致します。
(書式の乱れについては突っ込まないでください。時間がなかったのです)

『ミステリーズ！』

「たったいまの出来事」(2005,10,p10-13)

「『製鉄天使』刊行記念 桜庭一樹インタビュー」(2009,12,p8-13)

「故郷を書くために、故郷を離れるということ」(2012,12,p166-173)

『ミステリマガジン』

「桜庭一樹インタビュー 少女と箱庭と青い空」(2005,11,p71-75)

「桜庭一樹インタビュー～少女は探偵に向いているか？～」(2012,4,p48-57)

『オール讀物』

「ブックトーク」(2007,10,p307)

「ブックトーク」(2009,12,p281)

『本の旅人』

「今月の角川文庫編集長 桜庭一樹」(2009,4,p2-9)

「信じ合い、助け合う子供達を書きたい。」(2009,10,p2-13)

「濃縮しながら悠久に広がっていく世界」(2010,5,p12-19)

「桜庭一樹『GOSICK』シリーズ」(2011,5,p16-19)

「対談 桜庭一樹 × 高野和明」(2012,1,p8-13)

『文藝春秋』

「名前という地図」(2010,3,p90-91)

『青春と読書』

「『ばらばら死体の夜』刊行記念インタビュー」(2011,5,p6-11)

『ダ・ヴィンチ』

「蘇った死者を葬る物語はこれまでの作品の先にあるもの」(2012,12,p50-51)

<付録>



桜色ハミングディスタンス

『桜色ハミングディスタンス』は 2005 年に行なわれた第4回文学フリマにおいて桜坂洋と桜庭一樹が共著で発行した同人小説です。

… 物語は、小説家である「桜坂洋」こと「ヒロシ」と「桜庭一樹」こと「真理子」が共著して文学フリマに出すために小説を書かねばならない、と言うメタな場面から始まります。

… 『桜色ハミングディスタンス』では二人の作者がそれぞれ物語を書き始め、やがてお互いの文章を改変しながら「二人で」一つの物語を紡いでいきます。はじめは段落を変えるなどそれぞれの書いた文章が分かりやすくなっているものの、そのうち「この文章はどちらが書いた」という区別がつかなくなっていく。この文章は桜坂洋が書いたのか？桜庭一樹が書いたのか？読者は既成概念である「作者と紡がれる物語の同一化」を揺るがされます。

桜坂洋と桜庭一樹の同人小説 『桜色ハミングディスタンス』 - 三軒茶屋 別館

(<http://d.hatena.ne.jp/sangencyaya/20080122/1200953213>)

トウブタイガーサラマンダー

Ambystoma tigrinum

(画像:Wikimedia Commons より)



メキシコサラマンダー(アホロートル個体)

Ambystoma mexicanum

(画像:Wikimedia Commons より)

ぼてぼて茶

茶どころとして知られる城下町・松江市。元々、奥出雲のたたら製鉄の職人さん達が高温で過酷な作業の合間に、立ったまま口に流し込んでいた労働食だといわれています。また、不昧公の時代の非常食だったと言う説や、上流階級の茶の湯に対抗して庶民が考え出した、趣味と実益を兼ねた茶法だとする説等いろいろです。乾燥した茶の花を入れ、煮出した番茶を丸みのある筒茶碗に注ぎ、長めの茶筴で泡立てます。この泡立てるときの音から「ぼてぼて茶」の名がついたといわれています。泡立てたお茶の中に、おこわ、煮豆、きざんだ高野豆腐や漬物などの具を少しずつ入れれば出来上がり。箸を使わず、茶碗の底をトントンたたいて片寄せた具をお茶と共に流し込みます。



大山・中海・宍道湖の旅まるわかりガイド

(<http://furusato.sanin.jp/p/area/matsue/73/>)